

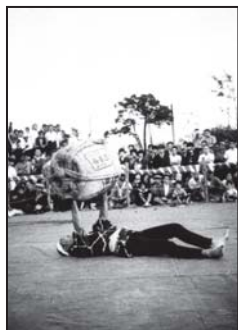
歴史と文化を 考えよう

'09 江東区文化財保護強調月間

木場の角乗



1952年 都指定
無形民俗文化財



1956年 都指定
無形民俗文化財

深川の力持

※演技の内容により時間が多少ずれる
ことがあります。

深川の力持 (深川力持睦会)

【都指定無形民俗文化財】

午後2時50分～3時45分

(富岡八幡の手古舞保存会)

砂村囃子 (砂村囃子睦会)

【区登録無形民俗文化財】

午後2時25分～2時40分

富岡八幡の手古舞

木場の水遣 (木場木遣保存会)

【区登録無形民俗文化財】

午後1時45分～2時25分

木場の水遣念仏 (木場木遣保存会)

木場の水遣 (木場木遣保存会)

【都指定無形民俗文化財】

午後1時～1時40分

午後部の部 (木場公園内ふれあい広場)

木場の角乗 (木場角乗保存会)

【都指定無形民俗文化財】

午前11時～午後12時30分

午前部の部 (木場公園内入口広場)

毎年恒例となっています、江東区民俗芸能大会は10月18日(日)の区民まつりで開催されます。

【都指定無形民俗文化財】

午後11時～午後12時30分

午前部の部 (木場公園内入口広場)

毎年恒例となっています、江東区民俗芸能大会は10月18日(日)の区民まつりで開催されます。

【都指定無形民俗文化財】

午後11時～午後12時30分

午前部の部 (木場公園内入口広場)

毎年恒例となっています、江東区民俗芸能大会は10月18日(日)の区民まつりで開催されます。

【都指定無形民俗文化財】

午後11時～午後12時30分

午前部の部 (木場公園内入口広場)

毎年恒例となっています、江東区民俗芸能大会は10月18日(日)の区民まつりで開催されます。

【都指定無形民俗文化財】

午後11時～午後12時30分

午前部の部 (木場公園内入口広場)

下町文化

NO. 247

2009.09.25

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.
lg.jp/

○09 江東区文化財保護強調月間 民俗芸能大会演目紹介

東京文化財ウィーク

東京8区文化財古民家めぐり

○中川船番所資料館特別企画展

「江戸の流通と中川番所」

□国登録有形文化財「旧東京市深川食堂」
深川東京モダン館

市民の食生活を支えた市設食堂

☆江東歴史紀行

莫越山神社と祖神信仰

～江戸東京の太工職組合～

○「深川東京モダン館」10月10日オープン

○ココにも歴史があった

10/18(日)江東区民まつり

民俗芸能大会

木場公園で開催

演目紹介

木場の角乗



江戸時代から木場の川並は、水に浮かべた角材の上を軽々と動き回り、鳶口を使って選別や筏に組む作業をしていまし

た。角乗りはそうした日常の仕事の中から生まれたもので、次第に角材を乗り回す技術に道具を用いるようになり、より高度な技が考え出されました。やがて芸能として一般に披露されるようになり、文政3年（1820）には角

竿熊野十二所権現（現新宿区）で興行が行われました。演技者を「太夫」と呼び、演目ごとにテンポよく語られる口上にはこうした歴史が感じられます。

木場の木遣・木遣念仏



木遣は川並衆が木材を水から揚げたり運搬したりする時に、お互いの息を合わせるため掛声のように即興の詩をつけて歌ったものです。材木の大きさによって歌ったもので、間が異なり大間・中

間・早間に分かれ、このほか大木遣や納の木遣などがあります。歌詞に川並の日常の仕事と結びついた用語が盛り込まれているところが特徴です。

木遣念仏は、大数珠を繰って百万遍念仏を唱えます。木場の川並、船頭、材木屋で組織される永代講で仲間の家に不幸があつた時におこなっていました。音頭をとる人が1人、木魚を叩き算木を操る人が1人、そのほか数十人で大数珠繰ります。念仏に木遣の節が取り入れられています。

砂村囃子



葛西囃子の流れを汲むお囃子です。葛西囃子は享保年間（1716〜36）の初めに葛西の総鎮守香取明神社（現在の

葛西神社）の神官が付近の農民に教えた「わかばやし」がはじまりといわれ、砂村地域にも比較的早い時期に伝播したと思われます。同時に披露される獅子舞では、獅子のさまざまな仕種をお楽しみください。

富岡八幡の古舞

長い間辰巳の芸者衆によって受け継がれてきた芸能で、現在は保存会によって継承されています。江戸時代



- 会場**
●都立木場公園（木場4丁目）入口広場・ふれあい広場
- 交通**
●地下鉄東西線「木場駅」下車徒歩5分
●地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
●都バス「業10」〔業平橋駅前〜新橋〕木場4丁目・東京都現代美術館前下車



から続く伝統があり、金棒を引き、木遣を歌いながら神輿の前を練り歩く姿は、もともと神輿を先導し、指揮する役割であつたことが窺われます。裁着袴に男鬘という男装の出で立ちがあでやかです。

深山の力持

深川佐賀町界隈は様々な物資の集積



した。こうした人々の間で、俵や酒樽を持上げる曲技が生まれ、文化・文政期（1804〜30）には職業的に見せ物とする団体が現れました。発祥地である蔵の街・深川佐賀町にふさわしく、米俵のほかに仕事場で使用する杓や長柄、桶、脚立などを使用します。

お知らせ

区内に伝わる民俗芸能をご覧になる機会は年に2回です。1回目は、10月の区民まつり、2回目は1月に開催される「新春民俗芸能の集い」です。今年度の予定は次の通りです。

日時 平成22年1月18日（日）

会場 江東区文化センター（2階）ホール（東陽4-11-3・江東区役所東隣り）

※詳細は、区報、ホームページをご覧ください。なお、「木場の角乗」はビデオ上映となります。

問合せ
文化観光課文化財係
☎3647-9819
HPアドレス
<http://www.city.koto.lg.jp/>

東京8区

文化財古民家めぐり

都内にある文化財の古民家を巡り、それぞれの住宅を見くらべてみませんか。各区では左表の日程で建物や地域の歴史、生活について解説します。

江東区では区指定有形文化財である旧大石家住宅の公開と解説を行います。日時・会場は次の通りです。

10月23日(金)

13時30分～15時30分

11月4日(水)・11月15日(日)

10時～12時

時間内で随時解説・定員20名程度

は江戸川区との共同開催

会場

旧大石家住宅

江東区南砂5―24地先 仙台堀川公園内

問合せ

文化観光課文化財係 (3647) 9819

中川船番所資料館特別企画展

「江戸の流通と中山番所」

江東地域は縦横に掘割が交差し、物資輸送に重要な役割を果たしてきました。徳川家康による小名木川の開削に始まる掘割網の形成は、大消費都市江戸の成立がその前提でした。

家康の時代から、城の東に「最初の下町」として発展してきた日本橋・京橋などの町々は、当初は本店や問屋の本店だけでなく、土蔵が立ち並ぶ「蔵の町」としても機能していましたが、やがて江戸の拡大とともに物資の貯蔵は、外周部の八町堀・靈巖島へと広がり、やがて隅田川を越えて深川、江東地域にまで及びました。このような地域ごとの役割は、江戸が東京に変わっても継承され、今日に引き継がれています。

本展示では、日本橋や京橋にも多く見られた掘割や荷物を上げ下ろしする

場としての河岸のようすを浮世絵や古写真、使用されていた道具類などから紹介します。さらに江東地域が果たした役割についても、掘割の形成や中川番所関連の資料から紹介します。

江戸・東京の中で捉えたときの江東地域の果たした役割を考える上で、流通は欠かせないテーマです。ご来館をお待ちしております。

期 間 10月28日(水)～11月23日(祝)

9時30分～17時(入館は16時30分) 月曜休館 11月23日(月・祝)は開館。

観覧料 大人200円 小中学生50円

場 所 都営地下鉄新宿線東大島駅大島口下車徒歩5分

※11月23日(月・祝)午後1時よりミニシアムトークを開催します。

問合せ 3636―9091

中川船番所資料館

展示資料から



『名所江戸百景 鑑の渡し小網町』

歌川広重画 教育委員会蔵

江戸経済の中心、日本橋川の日本橋小網町と茅場町を結ぶ渡し場です。江戸初期からの経済の中枢であり、沿岸に立ち並ぶ白壁の土蔵は、「蔵の町・小網町」をつかがわせます。「正宗」と記された酒樽を積んだ船は、靈巖島の新川への便でしょうか。この江戸の繁栄の背景に江東地域の存在がありました。

他区の日程と会場

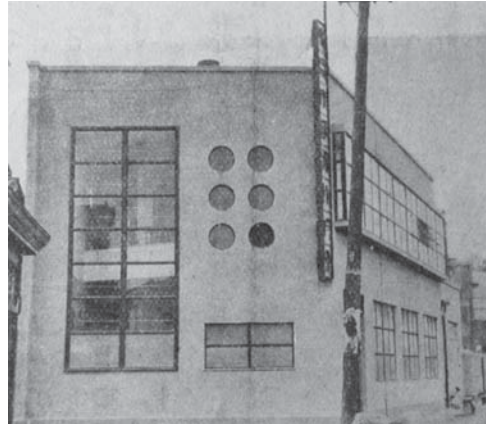
会場	解説日時	問合せ先
足立区 旧和井田家住宅 足立区鹿浜 2-44-1 都市農業公園内	10/18(日)・11/15(日) 11:00・14:00・15:00 (1日3回、各回45分程度、定員なし)	足立区教育委員会 文化課文化財係 03(3880)5984
板橋区 旧粕谷家住宅 板橋区徳丸 7-11-1	11/9(月)～11/15(日) 10:00～16:00 (随時解説、定員なし)	板橋区教育委員会 生涯学習課文化財係 03(3579)2636
江戸川区 一之江名主屋敷 江戸川区春江町 2-21-20	10/23(金)・11/11(水) 10:00～11:00、11/15(日)13:00～ 14:00・15:00～16:00 (各回定員30名)	江戸川区教育委員会 教育推進課 文化財係 03(5662)7176
北区 旧松澤家住宅 北区赤羽西 5-2-34 赤羽自然観察公園内	10/18(日)・11/12(木)10:00・13:00 10/24(土)10:00・13:30 (1日2回、各回1時間程度、定員40名)	北区教育委員会 生涯学習推進課 文化財係 03(3908)9325
杉並区 旧篠崎家住宅主屋・ 旧井口家長屋門 杉並区大宮 1-20-8 杉並区立郷土博物館内	10/11(日)・11/3(火)・ 11/21(土)14:00～15:30 (各回定員30名)	杉並区立 郷土博物館 03(3317)0841
世田谷区 世田谷区 次大夫堀公園民家園 世田谷区喜多見 5-27-14	10/4(日)・10/17(土)・ 11/27(金)13:30～15:30 11/28(土)10:00～12:00 (各回定員30名)	世田谷区教育委員 会生涯学習・地域・学 校連携課民家園係 03(3417)5911
目黒区 旧栗山家主屋 目黒区碑文谷 3-11-22 すずめのお宿緑地公園内	10/10(土)・10/22(木) 13:00・14:00、11/7(土)10:00・11:00 (1日2回、各回45分程度、定員30名)	めぐろ歴史資料館 03(3715)3571

江戸川区・杉並区は入場に費用(各100円)がかかります。他は無料。

各区により定員が異なります。予定定員数を超えた場合は、安全のため人数を制限させていただく場合があります。

詳細は見学希望の各区へお問い合わせください。

市民の食生活を 支えた市設食堂



「東京市公報」昭和7年3月22日(東京都公文書館蔵)

写真の建物の特徴的な丸窓に見覚えのある方もいらっしゃるでしょう。江東区内職補導所、福祉作業所を経て、この秋、「深川東京モダン館」として新しい一步を踏み出す建物です。角に付いている看板には「東京市深川食堂」とあります。この建物は、昭和7年(1932)に東京市の市設食堂として建てられました。平成20年度に現存する数少ない震災復興建築物である点と、区内に残る希少な戦前の近代建築物であることから文化財な価値が認められ、国登録有形文化財(建

造物)に登録されるとともに、区登録有形文化財(建造物)となりました。写真は、その「深川食堂」の竣工を報じる昭和7年3月22日付けの東京市公報のものです。では、市設食堂とはどのようなものだったのでしょうか。

設置の経緯

市設食堂は、社会施策の一環として東京市が経営した食堂のことです。公衆食堂とも呼ばれました。昭和7年当時、東京市内に16カ所あり(表参照)、設置の契機は大正時代に押し寄せた物価騰貴にありました。

大正7年(1918)7月、富山県で起こった米騒動は、またたく間に全国に波及し、東京でも8月13日から17日にわたり、銀座、浅草、神田、下谷方面で商店への投石や白米商が脅迫を受けるといった騒動が続きました。その背景には、米消費人口の増加や米を投機的に扱う商人の買い占め、売り惜しみによる米価の高騰がありました。そのため、都市の中産階級以下の人々はきびしい生活難に襲われました。

こうした人々のために、安くて栄養価の高い食事を提供することを目的として、大正9年(1920)9月に神楽坂公衆食堂(牛込区通寺町・現新宿区)と上野公衆食堂(下谷区車坂町・現台東区)が初めて設置されました。

大正11年(1922)には、麹町区・神田区(現千代田区)・日本橋区(現中央区)・浅草区(現台東区)・本所区(現墨田区)に新たに開設を予定し建築工事が行われていました。しかし、翌12年9月の関東大震災で神楽坂を除く公衆食堂はすべて焼失し、以後、東京市の公衆食堂設置計画は震災復興事業に組み込まれていきました。

震災復興と市設食堂

震災により市設食堂の増設はさらに必要性を増し、大正14年(1925)度中に仮設を含めて10カ所を建設し、焼失を免れた神楽坂食堂を加え11カ所となりました。その他、震災救護事務局から常設の食堂を建設するための資金として25万円が充てられ、本郷区真砂町(文京区)と深川区本村町に敷地を購入し工事に着手しました。この本村町の敷地に、大正15年(1926・昭和元)6月12日に猿江公衆食堂が開設しました。

震災後応急に設置された仮設の公衆食堂は区画整理により順次閉鎖され、

被害にあった食堂は、昭和3年ごろには、新設再開されました。

深川食堂の建設

震災後の大正13年(1924)2月1日、深川黒江町49・50に深川公衆食堂が開設しましたが、仮設であったため同15年3月31日に廃止となり、昭和3年(1928)には新たに設置することを前提にして、敷地の買収交渉が進められました。昭和5年(1930)に、和倉町4丁目20番地が候補地として挙げられますが、市参事会で審議の結果否決されました。その後、昭和6年に深川黒江町64番地の土地80坪を購入し、9月1日に建築工事に着手しました。同年12月には隣接する門前仲町の土地10坪42勺を追加購入し、合わせて90坪42勺の敷地を確保しました。昭和7年3月、コンクリート2階建、延床面積106坪の建物が完成、4月より営業を開始しました。総工費は5万1千350円でした。これが写真の建物です。

市設食堂の事業内容

大正9年に設置された当初の公衆食堂では、魚や煮物を中心としたおかずに味噌汁と香物を付けた献立を日替わりで提供し、値段は朝食12銭、昼・夕食15銭でしたが、時代とともにその内容にも変化が見られるようになります。

す。昭和4年（1929）11月から最高50銭を限度とする嗜好食や飲料水、果物などの販売を開始しました。

昭和9年（1934）の「東京市設食堂条例」によれば、営業時間は午前6時から午後7時まで、休日は1月1日から3日までの3日間のみでした。同「東京市設食堂条例施行細則」には食堂のメニューと価格が次のように定められています。（『東京百年史』）

	定食		
	朝	夕	
	甲	乙	甲
嗜好品	10 銭	8 銭	10 銭
和洋食ランチ類	50 銭	15 銭	10 銭
同	40 銭		
和洋食ランチ、親子丼	30 銭		
天丼、ハムライス類	20 銭		
カレーライス、肉うどん類	15 銭		
サラダ、フライ類	10 銭		
パン、飯（大盛）類	7 銭		
並うどん、飯（小盛）類	5 銭		
香ノ物（上）	3 銭		
同（並）	2 銭		
飲物菓子及果物			
ケーキ類	10 銭		
カステラ、ソーダ水類	7 銭		
ミルク、コーヒー類	5 銭		
生果	時 価		
緑茶	2 銭		

表 昭和7年当時の市設食堂

名称	所在地（現在）	開設年
神楽坂食堂	牛込区横寺町1（新宿区）	大正9年（1920）
上野食堂	下谷区車坂町25（台東区）	大正9年（1920）
神田食堂	神田区鎌倉町2（千代田区）	大正12年（1923）
三味線堀食堂	浅草区小島町1-33-3（台東区）	大正13年（1924）
丸ノ内食堂	麹町区丸ノ内21-1（千代田区）	大正13年（1924）
九段食堂	麹町区九段1-2-1（千代田区）	大正13年（1924）
真砂町食堂	本郷区真砂町36（文京区）	大正15年（1926）
猿江食堂	深川区住吉町2-12（江東区）	大正15年（1926）
大塚食堂	小石川区大塚仲町16（文京区）	昭和2年（1927）
芝浦食堂	芝区海岸通2-10（港区）	昭和2年（1927）
柳島食堂	本所区業平橋5-7（墨田区）	昭和4年（1929）
緑町食堂（旧相生町食堂）	本所区緑町1-4（墨田区）	昭和5年（1930）
新宿食堂	渋谷区千駄ヶ谷町5-1003（渋谷区）	昭和6年（1931）
茅場町食堂	日本橋区茅場町1-6-5（中央区）	昭和6年（1931）
田町食堂	芝区田町4-20（港区）	昭和7年（1932）
深川食堂	深川区門前仲町16（江東区）	昭和7年（1932）

昭和9年、米10kg 2円9銭8厘（小売）、そば1杯10銭でした（『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』）。

市設食堂の廃止

市設食堂は、物価騰貴による庶民の食生活難を緩和することを主な目的として設置されましたが、経済危機が一段落すると利用者は減少し、経営難となる食堂もありました。昭和11年4月9日の「東京市公報」（東京都公文書館蔵）では、時代の推移により営利目的の大衆食堂が進出し、市営食堂は打撃を蒙り利用者数が減少し赤字の食堂も多く、最も営業不振の真砂町・神田・深川の3食堂は3月31日をもって閉鎖するに至ったとあり、深川食堂の閉鎖

た。

翌14年の凶作により戦時下の食糧問題が深刻化し、さらに16年からの配給制度の実施、17年の食糧管理法の公布などにより、業務用の米の配給も次第に規制されるようになり、18年3月、深川栄養食配給所は再び深川食堂と改められました。

市設食堂は、昭和19年（1944）4月、米飯提供所とともに雑炊食堂となり、一食30銭程度で雑炊を提供しました。11月には前年に施行された都制をうけ都民食堂と改め、戦後は、外食券食堂、民生食堂へと変遷していきました。

このように推移する社会情勢のなか、市民に安くて栄養のある食事を提供するという公衆食堂の理念は継承されていきました。

* * *

歴史的建造物である「旧東京市深川食堂」の建物を保存し活用する「深川東京モダン館」は、外観は建築当時の姿に近づけ、内部には当初の様子が偲ばれる階段などがそのまま保存されています。かつてちよつとモダンなメニューを取りそろえていた公衆食堂を思い浮かべ、大正から昭和への過渡期の暮らしに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（文化財主任専門員 向山伸子）

莫越山神社と祖神信仰

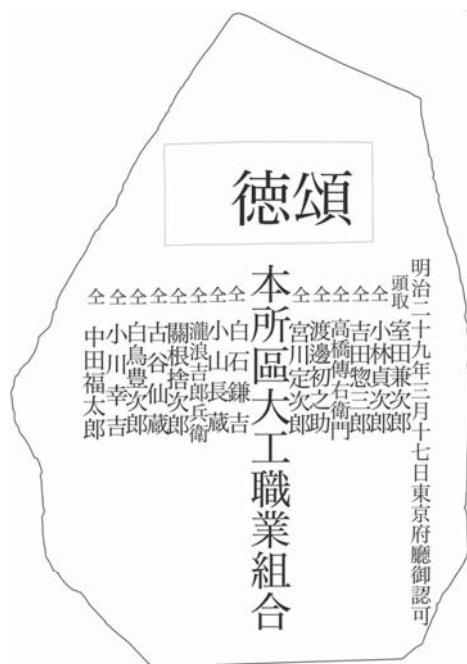
江戸東京の大工職組合

千葉房総半島の南端、南房総市杵見^{くづみ}に莫越山神社という延喜式内社が鎮座しています。延喜式内社とは、「延喜式神明帳（式）」に登載されている神社を指し、古くから信仰を集めていたことがわかります。神社の由緒によ

ば、神武天皇元年に天富命^{あめとみのみこと}が忌部の諸氏を率いて安房国に來臨し、随行した天小民命^{あまのこたみのみこと}と御道命^{みちのみこと}の祖神である手置帆負命^{たおきほねのみこと}、彦狭知命^{ひこさちのみこと}をこの神社のある土地におまつりしたとあります。



写真1 本所区大工職業組合頌徳碑（莫越山神社）



この手置帆負命、彦狭知命は工匠、家屋守護の祖神であつたため、古くから大工職など家屋造作に関わる人の信仰が篤かつたようです。神社境内には、明治42年（1909）建立の「莫越山神社祖神講再興碑」がありますが、この内容を見ると次のようなことが記されています。宝暦11年（1763）に江戸講中の京橋弓町（中央区銀座2丁目）の大工渡辺万右衛門、渡辺平八が神社に奉納をしていま

す。また、文政10年（1827）3月には、江戸橋町（中央区東日本橋3丁目ほか）の石工伊賀屋定吉が狛犬一對を寄進するなど、江戸市中の大工や石工職の信仰を集めていたことが確認できます。

境内には地元の人々の奉納物よりも、四谷や浅草、葛飾の大工職などで結ばれた祖神講が奉納した石造物が多く残されています。その中に次にあげる本所区大工職業組合が奉納した頌徳碑も建てられています。石碑によれば、本所区大工職業組合は、明治29年（1899）3月17日に東京府の「御認可」を受けた旨が記されています。そして、頭取として室田兼次郎ほか13名の名前が刻まれ、裏面には碑の建立年である大正12年（1923）6月吉日の日付と建碑の奉納者が連名されています。

このように江戸市中の大工職などに信仰が厚かつた莫越山神社は、明治に入ると祖神講社と名付けた分社を浅草に設立します。明治8年（1875）10月7日、東京府下第六大区五小区深川東森下町四十八番地の立川小兵衛を世話人惣代、第五大区一小区浅草新福井町二番地の間宮彦一郎を願人として、「講社名儀并教会所設立御願」（東京都公文書館蔵）が東京府知事大久保一翁に宛てて提出されます。

願書によれば、莫越山神社は「御府下」（江戸）においても、古来より木匠や諸匠たちが「格別信仰」しており、既に莫越山祖神講と称する信仰集団が組織されていました。明治6年に大教院から出された「教会大意」に従って、莫越山祖神講を結社として設立し、浅草西鳥越町甲二番地に教会所を建設したいというのが、願書の趣旨でした。

願書に登場する「教会大意」は、明治5年に設立された大教院によって制定されたものです。大教院は、明治新政府が推進した宗教政策によって設置された教部省所管の民間団体です。明治初年は廃仏毀釈^{はいぶつきしやく}の考え方によって、寺院が大きな打撃を受けますが、仏教各宗の提唱によって、神仏合併を目論んで大教院を設立します（『国史大辞典』）。この大教院の打ち出した施策の一つに「教会大意」がありました。

「教会大意」は同時に出された「三条教憲」と連動しています。敬神愛國の体を保ち、天理人道を明らかにし、皇上を奉戴し、朝旨を遵守すべきという「三条教憲」を基とし、10条にわたって組織のあり方などについて示したものです。この「教会大意」によって、富士講や黒住教などの信仰も明治政府によって宗教組織として認可されました。莫越山神社祖神講社もこのような

形で、莫越山神社の東京分社としてその信仰の拠点となったのです。

教会は願人である間宮彦一郎の居宅の脇に設けられ、分社のほか拝殿や池なども配置されたものでした（「講社名儀并教会所設立御願」 東京都公文書館蔵）。この分社設立にあたっては、164人もの人々から二千円もの寄付金を集めています。江東区域では、亀戸町14番地の中田蔵次郎、深川上大島町13番地の鈴木庄五郎らの名前が挙げられています（「莫越山神社分社永続方法」 東京都公文書館蔵）。講社設立の世話人惣代となった立川小兵衛や、寄付金を出した中田や鈴木といった人物の来歴は不明ですが、大工職に関係

のある人々であったことが想像されます。

その後の記録は、管見の限り見あたりませんが、莫越山神社が作成した講社の起源沿革によれば、教会は本所に移され、明治39年（1906）3月に本所区大工職業組合に管理が依頼されたとあります。当時の組合長は白鳥豊次郎で、前述の頌徳碑にも頭取として名前が載せられています。

本所区大工職業組合は、頌徳碑の刻銘によって、明治29年3月17日に東京府の認可を受けたことは確認できますが、それ以外の詳細についてはよく分からないのが現状です。大工職による組合は、江戸時代の大坂や堺で大工仲

間が組織されていたことが確認できます（遠藤元男『近世職人の世界』雄山閣）。江戸でも同様な組織があったものと想像されますが、資料としては残されていません。

近代に入ると、東京では明治21年に東京大工職業組合が組織されます。その規約によれば、東京大工職業組合の会員は「東京府下二一家ヲ為シ独立シテ大工職業ヲ営ムモノ」とし、大工職業の定義は木・石・鉄・鋏（煉）瓦等の諸材料を使用して、宮殿・社宇・堂塔・家屋・倉庫・門牆・橋梁や器械工場等を築造する人々を示しています。組合は東京府下の15区、6郡を地区別しており、本所区大工職業組合はこの組織の後進団体か何らかの関係があったことが考えられるのです。

莫越山神社の神輿蔵内には古い奉納額がかけてられています。昭和9年（1934）9月1日付で奉納された奉納額の右脇には、「東京大震災十三年記念」と彫られ、下部には「睦会」とあります。額の内側は鏡餅の飾り、下段には奉納者の札がはめ込まれています。奉納者の住所を見ると、本所、向島区内の人々の中に「亀戸四 藤村」「亀戸 鈴木」といった城東区域の名前を見ることができます。また、下段に「四ツ木橋 室町」という名前

がありますが、この会社ももともとは亀戸町で創業した大工職でした。

「睦会」とのみ名前が入れられていますが、下段の中に「小梅 白鳥」とあります。本所区大工職業組合の頭取として白鳥豊次郎の名前があることから、この「睦会」は本所区大工職業組合から派生したものであると想像されます。本所区といいながら、向島や亀戸あたりの大工職の名前も入っており、これは明治21年の町村制施行前に亀戸村をはじめ柳島、小梅などといった村々が錯綜していた名残りなのでしょう。

現在、本所に置かれていたとされる分社は存在せず、奉納されていたものなども莫越山神社に戻ってきているようです。今でも大工職や建築会社の信仰が篤く、団体バスで参拝する人々も訪れています。江戸・東京の大工職の実態については、良く分からない部分が多いものの、その繋がりを示す貴重な資料といえるでしょう。

末筆になりましたが、今回の調査にあたっては齋東清道さん、室町幸治さんにいろいろとご教示頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

（文化財専門員 龍澤潤）



写真2 東京大震災十三年記念本所睦会奉納額（莫越山神社蔵）

旧東京市深川食堂を再生活用

深川東京モダン館

10月10日
オープン

旧東京市深川食堂（国登録有形文化財建造物）は昭和7年建築の関東大震災後の復興建築物です。戦後、職業安定所となり、昭和54年に区に移管された後は、内職補導所、障害者授産施設として平成18年まで活用されました。

この建物は、関東大震災の復興によって本格化した、東京という都市の近代化を伝える建築物として、そして、昭和初期の最先端の構造技術、建築デザインを伝える数少ない現存施設としての歴史的価値を持つ重要な施設です。このことから、今後も活用しながら保存・伝承していくこととし、昨年度に改修を実施しました。



装飾のない水平に連続するスチールサッシの窓が特徴の外観



竣工当時の姿を残している1階と2階をつなぐ階段室部分

近代東京の建物の特徴、歴史を伝えると共に、今後は観光及び新たな文化の発信拠点として活用していきます。

2階建ての建物のうち、1階部分は観光案内・発信スペースとして、区内の様々な観光資源の紹介や新たな資源の発掘を行います。2階部分は新しい文化の発信スペースとして、自主企画展や美術展を開催するほか、文化イベント、ギャラリー等の用途で貸出を行います。なお、館の運営は深川観光協会が行ないます。

10月10日からオープン記念企画展示「深川東京モダン館の時代」（観覧無料）を開催します。また、オープン日当日にはオープニングイベントも開催します。是非一度深川東京モダン館に足をお運びください。

開館時間 午前10時～午後8時
休館日 月曜

入館料 無料（2階は有料の場合有り）
問合せ 深川東京モダン館
（休日の場合、翌営業日休）

江東区門前仲町1-19-15
☎03(56339)1776

ココにも歴史があった

2枚の古写真は、いずれも大島にある中央通り沿いの戦前の様子を撮影した貴重な写真です。

1枚目は、3代続けて大島にお住まいの我妻尚道氏の所蔵品で、大正14年（1925）9月に水の事故で幼くして亡くなった、我妻氏のおじにあたる方の葬送の様子が写されています。中央通りと中の橋通りの十字路から東側を向いて撮影されました。右手奥の神輿風のものは現在の霊柩車にあたり、左手の旗は町旗とみられます。この写真は、東京大空襲の時に我妻氏の祖母が持ち出して戦災を逃れた、お宅に残る唯一の戦前の写真だそうです。

2枚目は大島7丁目の長谷川富士子氏がお持ちの写真で、中央通りにあっ



た宿屋「富士屋」を写したものです。

記念写真とみられますが、何の折りに撮影したものかはわかりません。富士屋は長谷川氏の本家が営んでいた旅館兼下宿で、富山の薬売りの定宿でもありましたが、詳しい場所は不明です。丸八通りよりは東側にあり、向かいには読売新聞の販売所、近くには林病院があったそうです。長谷川氏は戦時中に富山に疎開していたため、この写真は空襲の被害に遭わずに済んだとのこと。

どちらの写真でも、中央通りはまだアスファルトで舗装されていません。また、写っている人々は和服で正装しています。

（文化財専門員 中西 崇）